



Title	地域イメージの歴史の変遷とアニメ聖地巡礼：鎌倉を中心として
Author(s)	玉井, 建也
Relation	観光資源としてのコンテンツを考える：情報社会における旅行行動の諸相から = Current Issues in Contents Tourism : Aspects of Tourism in an Information-Based Society
Citation	CATS 叢書, 7, 121-138
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49638
Rights	© 2012 玉井建也
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS07_008.pdf



地域イメージの歴史の変遷とアニメ聖地巡礼

—鎌倉を中心として—

玉井建也¹

1. はじめに

現代文化、特にポップカルチャーやコンテンツをめぐる研究は特に産業面など社会科学から着目されるようになってきている（長谷川文雄・福富忠和 2007、出口弘・田中秀幸・小山友介 2009、河島伸子 2009）。またマスメディアなどで「クールジャパン」といった言葉が使われることと連動するように、地域社会の中で現代文化との関係がより密接になり、特に町おこし・地域おこしの中で観光として生かされる事例が多く見られるようになってきていることも注目に値する（長谷川文雄・水鳥川和夫 2005、森下剛 2007・2008、清水 2008）。しかし、安易に現代文化、特にコンテンツ作品を町おこしや観光へと繋げて良いのかという点は考慮すべきであろう。また、学術的にも単なる即時的な事例紹介で終わらず、地域性や歴史性を踏まえた上で考察していく必要性が存在する。コンテンツ作品を一面的に地域社会に平均化していくことは逆説的に難しい作業になってしまう。つまり地域社会の歴史性や地域性を今一度踏まえる必要性が生ずる。このような中、地域社会とコンテンツの関係を考えるにおいて、アニメ聖地巡礼という事例が重要になる。

アニメ聖地巡礼とは、アニメや漫画作品などの舞台を差し、ファン自身はその舞台を「聖地」と呼称し、めぐることを差す。山村（2008）では「アニメ作品のロケ地またはその作品・作者に関連する土地で、且つファンによってその価値が認められている場所」と定義付けられていることから、作品・地域社会・ファンといった要素が連動することによって成立する認識だということがわかる。特に成功事例として『らき☆すた』の舞台である鷲宮神社へのアニメ聖地巡礼が挙げられ、数多くの考察がなされている（山村 2008、岡本 2008・2009ab、今井 2009・2010）。また、鷲宮神社だけではなく様々な土地におけるアニメ聖地巡礼にも目が向けられている（玉井 2009・2010、佐藤 2010）。このような研究動向の中で、アニメ聖地巡礼が起こった地域社会の歴史性・地域性といった固有性にまで着目した研究はまだ数が少ないのが現状である（玉井 2009・2010）。特に様々な土地を舞台にした作品が作られ、そしてファンたちがそれぞれの舞台へと赴い

¹ 東京大学大学院情報学環特任研究員

ている現状をみるに、その現象を一面化することは簡単には出来ない。情報化社会における行動であるがゆえにフラット化する側面はあるであろうが（岡本 2010）、その中で地域性・歴史性に着目する必要がある。したがって本稿では鎌倉を舞台にした作品に着目し、鎌倉という地域性を踏まえてアニメ聖地巡礼という行動について考察する。

では翻って歴史学では、地域性をどう捉えてきたのであろうか。大枠としては国家史への対抗概念として成立した郷土史がまず成立し、その郷土史の視野の狭さやマルクス主義的価値観の欠如を受けて成立した地方史、中央に対する地方の従属性からの脱却を目指した地域史研究という各段階を指摘することができる（塚本 1976、黒田 1977、藪田 1985）。またこれらの流れを受けつつ、記憶や由緒といった点からのアプローチも行われるようになってきている（山本 2008、渡辺 2004・2009）。しかし、地方史・地域史研究のほとんどが経済・政治といった観点からの地域社会の捉えなおしであり、文化史としての地域社会の把握ではない。また、地域における自律的な記憶・記録の構成過程は検討されるが（渡部 2004・2009）、コンテンツ作品のように多様な価値観が入り混じり自律的に構築されていったとはいえない地域イメージ等への検討はなされていない。したがって本稿では文化史としていかに地域イメージさらには地域社会を捉えるかを検討する。

本稿で取り上げる鎌倉に関しては様々な研究が存在する。近世期においては、多様な階層がそれぞれの認識を持って鎌倉を訪れており（原 2005）、明治初期に訪れた外国人から「死都」と認識されたが、海水浴場や別荘地としての発展とともに避暑地そして観光地として再発見される（加藤 2002）。また、近年のまちづくりや市民活動を通じて、「古都」としての鎌倉の政策が形成されていく過程も指摘されている（福澤 2007）。また湘南地域に目を向けると雑誌やテレビ媒体などで若者や海といったイメージが形成される具体例が提示されている（加藤 2005ab、渡辺 2005、増淵 2010）。このような歴史的形成の中で、鎌倉を舞台とした作品群、特にアニメなどのコンテンツ作品とその歴史的背景、さらにはファンたちのアニメ聖地巡礼という活動の関係性はどのようなものがあるのだろうか。次章以降で検討していく。

2. 鎌倉イメージと展開と継続

前近代から鎌倉という土地は名所旧跡の多い場所として認識され、明治に入ってもその認識は持続していた。明治 13（1880）年に書かれた牧野豊太郎編『絵入道中独案内』では鎌倉は「名所旧跡多シ」とだけ書かれており、江ノ島や大山、藤沢、片瀬といった土地のほうが大きく取り上げられている。鎌倉について名所旧跡が多く取り上げられる

のは別に『絵入道中独案内』のみではなく、明治16(1883)年に発行された法木徳兵衛『江ノ島鎌倉名勝巡覧』では「鎌倉山に名所古跡を尋ぬるのを快樂の限とせり」と書かれている。またその他、明治21(1888)年発行の相良国太郎『鎌倉案内』、明治23(1890)年の堀内立雄『鎌倉江島金沢名所之柴折』、明治26(1893)年の佐藤寛『鎌倉江ノ島遠足の記』(万巻堂発行)、明治30(1897)年の新月庵主人『鎌倉江ノ島名勝手引草』(霜鳥晴発行)というように鎌倉の名所旧跡を取り上げる書物が立て続けに発行されていることから明治初期の鎌倉は名所旧跡の土地という認識が強かったことがうかがえる。

しかし、これが次第に変化していく。明治33(1900)年、大阪毎日新聞の記者である関貢米によって書かれた『緑蔭泉響』(高岡書店発行)では、大磯海水浴場がまず取り上げられ「貴族的海水浴場大磯駅」と表現されている。その繁栄ぶりは「夏期に至れば都人士先を争ふて此地に遊び来るが故に、貸本屋、雑誌新聞店、大弓、玉突、氷屋等、一時又増加して頗る雑沓を極む」と書かれている。また大磯のみならず鵜沼海水浴場、国府津海水浴場、酒匂海水浴場、小田原海水浴場も同様に取り上げられている。しかし、鎌倉に関しては「海水浴場としての鎌倉は、片瀬、大磯等に劣る数等なりと雖も、兎に角鎌倉山の星月夜と唄はれて、豪華極りなかりし古覇府のことにしあれば、名詞靈利固より多く、散策を試むべき名所古跡亦多ければ、夏季遊客を誘引する論なしと雖も、其遊客の重なるものは、所謂「通り一遍の客」にして長く滞在するも至て稀なり」と書かれており、海水浴場としての記述は少なくやはり名所旧跡の場所として捉えられていたことがわかる。同様の記述は印刷会社に勤務していた河本亀之助によって明治34(1901)年に発行された『かまくら及江の島』にても「昔の繁華は夢の様にあわれにも鯉取りの漁村となつたのである。多くの神社仏閣はいづれも衰へ廢れて、大名の邸宅は麦畑となり、墓場は毀れたり百姓の物置きとなつたものもある。実に栄枯盛衰は一場の夢であつた」と鎌倉に対して実態から来る廢れたイメージが生じていたことがわかる。しかし同書では江ノ島を訪れた際、「数年前蘇峰生の「江ノ島舟遊」なる一篇を国民新聞で読んだことがある、今自分が眼のあたりこの美に打たれて、尚一入感じたのである、吾々はとても筆を以て此の美を写すことが出来ぬ」と表現している。既に江戸時代以前から江ノ島は鎌倉と同様に名所として認識され人々が訪れる場所であった(原2001)。しかし、既述のように鎌倉の名所旧跡は旧態依然とした存在として認識されていたにも関わらず、江ノ島に関しては徳富蘇峰による『国民新聞』での連載によって新たな江ノ島イメージが発生し、訪れる人に新鮮さを提供していたことがわかる。

このような鎌倉へのイメージは継続する。俳人であった中村楽天が明治35(1902)年に出した『徒歩旅行』(俳書堂発行)では、中村自身が明治29(1896)年に鎌倉に滞在

したことがあり、「今日の鎌倉が著しく変化して居るのが分る、当時は西洋風の建物絶て無かつたが、今は所々に洋風がある」と鎌倉の変化を指摘している。しかし「鎌倉は山麓に少しばかりの平地があつて、其処へ波濤か打寄せて居ると云ふだけのことで、材木座から富士の見えるのが景物ぐらみなのである」と低い評価を下している。秋田師範学校の第3回京阪地方旅行が記された明治36(1903)年に発行された港多記編『第三回修学旅行記』では、「今や人馬の音静かに鶏犬高く吠ゆる僻村と化せしも、誰か此遺趾鎌倉を追吊して綿々たる懐古の情に堪へざるものあらざらんや、幕府の跡は何方ぞ唯見る麦秀漸々油々、豈無限の感なくしてかならんや」と僻村としての鎌倉を語っている。国文学者である東京帝国大学教授の芳賀矢一が明治38(1905)年に記した『内地旅行』(金港堂発行)でも旅中の会話で「鎌倉は頼朝の府を開いた処と読本で覚えて居たが、来てみれば何だか寂しいやうな処であるから、「阿父様。鎌倉は何だかつまらぬ処の様でございますね」と息子に言われている。これに対し芳賀は「今はこのようにさびれた。併し夏は東京あたりから海水浴、冬は暖かいといふので人が沢山くる様になつて、是れだけ新しい家も出来た。廿年程前はもう一層寂しかつた」と応えており、海水浴場などで活発になったという事実とともに印象としての寂しさが語られている。明治43年に随筆家の渋川玄耳が発表した『藪野棕十日本見物』(有楽社)では「鎌倉といふ名は日本外史に依て予に最初の印象を與へられたのである。(中略)何故か鎌倉は唯海浜だといふ外に何の想い寄りも無かつたのである。停車場に下りて、此処が鎌倉だ、あの恐らしい頼朝が居た処だ、つい四十余年前迄七百余年日本を支配した武家政治の本家だ、エライ鎌倉だと、考えて見るけれども、眼前に見える光景は平々凡々の小駅、だら／＼下る砂利道の何の奇も無い」と同様の感想が述べられ、「頼朝屋敷の方をぶらついて見る、此辺、歴史ぬきにしては格別面白い処はない」と切り捨てられる。

以上のように海水浴場などで多くの観光客が鎌倉やその周辺を訪れるようになり、場所自体の社会的な変化を起つてはいた。しかし、鎌倉自体に目を向けると観光客の増加と反するように名所旧跡のみが観光地として存在し、観光という観点からは近世以前から変化のないことにより寂れたイメージが生成されていた。

3. 郊外化する鎌倉とイメージ

前章のように次第に変化しつつあった鎌倉であるが、イメージとしては旧態依然としたものが存在していた。しかし明治後期にもなるとようやくイメージの上で変化が訪れる。詩人であった大町桂月が明治39(1906)年に記した『桂月小集』には「鎌倉も、明

治二十年頃までは、青山蒼田の間に古寺、古祠、茅舎が貼綴するのみにして、古色蒼然として、行人をして、懐古の情、一層切ならしめたりしが、汽車通じ、旅館増し、紳士往き（中略）全く俗地と成り了んぬ。八幡宮より、極楽の切通しまで家つづきとなるに及びては、芭蕉の『夏草やつはものどもの夢の跡』の石碑も、今は、物笑ひの種となりぬ」と書かれており、「俗地」として皮肉られていることから、次第に発展する鎌倉と旧態依然とした鎌倉という二つが同居しているがゆえの感想と考えられる。この名所旧跡が変わらずに存在するという点の一つには嘲笑の対象となりうるが、別の側面では称賛の対象ともなる。

新聞記者であった伊藤銀月が明治 44（1911）年に発表した『日本名勝史蹟』（前川文栄閣発行）では、「コンデンスしたる名勝、結晶したる史跡、風景の精脳、歴史の骨髓、悉く共に一区域に鍾められたるものを鎌倉となす」と名所旧跡が寄り集まっている点が逆に高く評価されている。そして「桜の鎌倉也、松の鎌倉也、山の鎌倉也、海の鎌倉也、神社仏閣の鎌倉也、別荘旅館の鎌倉也、夏は避暑の鎌倉也、冬は避寒の鎌倉也、総括して一大遊園の鎌倉也」と名所旧跡だけではなく、避暑地として近代以降発展した点をも含めて鎌倉という土地を評価している。しかし、総体として高い評価を下すのは伊藤などの一部であって、基本的には都会化する鎌倉と名所旧跡の鎌倉という二つの狭間でイメージは揺れ動いていた。新聞記者であり後に劇作家になった落合昌太郎が明治 44 年に発表した『郊外探勝その日帰り』（有文堂発行）では、鎌倉に関しては名所旧跡のみが取り上げられる半面、大磯は「明治になつて松本順先生が海水浴の効能を唱道してかた忽ちに繁盛を極める小都会となつた、謂はば海水浴場の先達で、諸般の設備が完全して居て、今では洋食屋、玉突場、新聞場、小料理屋、芸妓屋等何でも無いものは無い姿で俗化し尽して風雅な田舎らしい処は無くなつたが、却て当今の人情華美を競い驕奢を誇りとするには合ふかして矢張盛に人が出る」と海水浴場として「俗化」した点を強調している。この鎌倉の歴史性に着目する点は、明治 45（1912）年に詩人の児玉花外が発表した『哀花熱花』（春陽堂発行）でも「新橋出て車窓から額の髪を上げて瞥見せしのみ。大船を経て青空に動く白雲、老松の翠、石の古色、身は既に歴史中鎌倉の人と成つて、身の端蒼々の空気を呼吸する」などからもうかがえるが、都会化と名所旧跡という二側面でのイメージの揺れ動きは加速する。

明治 45 年に書かれた大橋良平の『現在の鎌倉』（通友社発行）では、「世に鎌倉の案内著書は多し、皆共に名所古址の案内のみに止つてゐる、現在の鎌倉が何れ程に発展しつゝあるかを見るものがないのは遺憾である、茲に聊か微力を以て現在の鎌倉を編して理想の案内記としたのである（中略）一度此鎌倉に足を踏む者は此等名勝古跡を熟知す、然

れども、未だ曾つて花の鎌倉水浴場の鎌倉別荘の鎌倉等に就きて攻究したる人は少なし、此れ此種の案内記あらざりし為なり即ち本書は独り此種の案内を主とせる所以なり」という理由で書かれ、「鎌倉の地理」、「戸数人口」などの基礎情報に続いて、「花の鎌倉」、「夏の鎌倉」、「想出多き秋の鎌倉」、「国宝に満たされた鎌倉」という項目が立てられて紹介が続き、「鎌倉の交通機関」、「現在の貸家貸間料」、「名所旧跡」などの具体例も提示される。そして特徴的な「別荘一覧」、「学校一覧」、「営業一覧」が記載されている。まさしく、別荘などが建ち並び都会化し、「毎年七月中旬か又は八月上旬頃より、九月の下旬頃迄定則の様に、必ず此地に来て別荘或は貸別荘又は貸間に避暑する人が多い、之れ等の人を別荘客、避暑客と云ふて、鎌倉土着の諸商人其他貸家業者は大に崇拜するのだ、それも其筈で鎌倉人士の財源は全く此避暑客別荘客にあるからだ、鎌倉は此夏期を書入時としてあるので一部の業者は此期節の収入が一年の諸経費に充てられるのである」とされるほどの繁盛をみせつつも、観光としては旧来からある名所旧跡が紹介されていく。

新聞記者であった高須梅溪が明治45年に発表した『スケッチ文集』(岡村盛花堂発行)では「この舞殿は幾度、詩人の筆に利用されたか知れない。文人までが同じ様に之を散文の中に入れて嗚呼の百万篇を繰返へしたのには流石の静御前も苦々しく思つてゐるだらう。来て見ると何の変哲もない。静御前の名詞が喰つ付いてゐるばかりに、猫も杓子も助倍根性を起して舞殿を見るに過ぎない」と鶴岡八幡宮にある舞殿に対して述べ、「何処までも月並ぢぢゃ」と余計な事まで言ふと、友は『左様なに言つたものではない。其処が鎌倉の価値ぢぢゃ』と弁護すると様々な媒体にて描かれ続けているがゆえに、その歴史性が新規性を失い観光コンテンツからかけ離れてしまっていることを示唆している。

このような中、大正に入り、鎌倉に関するエッセイを発表したのが作家の田山花袋である。大正6(1917)年に発表された『山へ海へ』(春陽堂発行)では「鎌倉はその時分から比べると、非常に開けた。その頃の面影はもうないと言つても好い位である。それに、今では東京の郊外と言ふやうな気分も多く加はつて来て、此処に家を持つてゐて、毎朝、汽車で通つて行く人も尠くない」と東京の郊外化している鎌倉について述べ、「私が初めて鎌倉に行つた時分には、いかにも廃都らしい趣に富んでゐて、小野湖山の『鎌倉懐古』の七律が思はず口に入るやうなさまであつた。(中略)それが明治廿七年の冬であつた。それに比べては、今は何といふ発展だらう。今では殆ど廃都といふ感じは、何処にも味はうことが出来なくなつた。昔は遺蹟が田舎肅條とした風景の中に浮き出してゐた。今は都会の郊外らしい気分の中に多い遺蹟はすつかり埋められて了つてゐた」と既に郊外としての鎌倉が成立しており、その中に名所旧跡が存在し続けている様子を指

摘している。

以上のように避暑地化そして東京の郊外化していく中で、鎌倉に存在する名所旧跡は近世以前から変わらずにあり続けるがゆえに観光コンテンツとしての旧態依然とした価値観を訪れた人々に抱かせ続けていた。その郊外化・避暑地化する鎌倉と名所を抱える鎌倉という二つのイメージの側面を併存させていくことになる。しかし、ここで着目すべき点はこの二側面化する鎌倉イメージは、鎌倉に別荘を持つことが出来る人々、そして鎌倉に旅行しそれらの文化を味わい、さらには文章として紀行文等で著作として発表できる知識人という人々によって生成され、普遍化していったものである。別荘以外に住んでいた人々、その他、知識人層以外の人々のイメージは紀行文や案内文といったコンテンツの枠外であることは注意すべき点である。

4. 再生産される鎌倉 —鎌倉文士から「青い花」へ—

郊外化する鎌倉と名所旧跡としての鎌倉という二つのイメージは並行して存続していく。しかし、次第にいわゆる鎌倉文士と呼ばれる鎌倉に居住する文筆家たちによって鎌倉の名所旧跡や風光明媚といった点が強調される文章が数多く発表されていった。またそれと同時に横須賀線や小田急といった鉄道路線が整備され、海水浴客の増加といった点から鎌倉や湘南といった地域における避暑としてのイメージが切り取られていくことになる（加藤 2005）。

鎌倉文士は既に明治期から鎌倉に居住したり別荘を持ったりして活動している者は多数存在していた。特に昭和に入り、小田急電鉄の発展とともに沿線にそして鎌倉に住む作家が認識されるようになっていった。1930年に漫画家の須山計一によって描かれた「漫画作家居住風景」（『文学時代』1930年9月号）はそれを端的に表現している。小田急沿線の作家たちを描きつつも、一番大きく描かれているのは鎌倉文士たちである。里見淳や大仏次郎、久米正雄、昇曙夢、ささきふさ、佐々木茂索、中村武羅夫、川路柳虹、吉江喬松、谷譲次、橋川健、小牧近江、金子洋文といった人物が描かれている。そこで描かれる彼らの様子は麻雀を行っていたり、船遊びを行ったり、釣りをしたり、海水浴を行ったりと既に名所旧跡とは関係のない行動であり、避暑としての鎌倉のイメージが強い。戦後になると鎌倉文士というイメージは消えていったが、次第に古都としてのイメージ（福澤 2007）、そして海水浴客のさらなる増加を受け（本宮 2005）、湘南を中心とした若者と強く結びついたイメージ形成（加藤 2005）へとつながっていく。特に避暑地として、別荘地としてのイメージは若者文化の生成により崩壊していく（加藤 2005）。

ここに至ってようやく、明治・大正期に生成された避暑地としての鎌倉、別荘地としての鎌倉、名所旧跡の土地としての鎌倉というものが対抗概念として若者文化に認識され、それを凌駕するように若者による様々なイメージが鎌倉や湘南といった地域に付与されていくわけである。このようななか、漫画やアニメなどのコンテンツ作品ではどのような描かれ方をしているのであろうか。

既に多くの指摘がされているように湘南を舞台とした作品として 1955 年に発表された石原慎太郎の『太陽の季節』が発表され、そして翌年、石原裕次郎のデビュー作として映画化され、「太陽族」という言葉とともに大ヒットとなった。このような湘南という土地で無軌道に生きる若者たちを描くというコンテンツの系譜は、のちに漫画作品として紡木たく『ホットロード』（『別冊マーガレット』にて 1986 年から 1987 年まで連載。単行本は 4 巻）、吉田聡『湘南爆走族』（『少年 KING』にて 1982 年から 1988 年まで連載。単行本は 17 巻）へとつながっている（難波 2007）。またそれとともに音楽の分野においても鎌倉や湘南の若者を描いたサザンオールスターズの作品を挙げることができる（加藤 2005）。その他にも、谷川史子『各駅停車』（集英社 1992 年）、井上雅彦『SLAM DUNK』（集英社、全 31 巻、1990 年-1997 年）、松本大洋『ピンポン』（『週刊ビッグコミックスピリッツ』にて 1996 年から 1997 年まで連載。単行本は全 5 巻）、西岸良平『鎌倉ものがたり』（『まんがタウン』にて連載中）と全ての作品を挙げることが出来ないほどの多数の作品にて鎌倉やその周辺地域は舞台として描かれている。

このような中で着目すべきは志村貴子氏による漫画『青い花』（『マンガ・エロティクス・エフ』にて連載中。2010 年 8 月現在既刊 5 巻、太田出版）である。この作品に着目する理由としては鎌倉を舞台としている点、アニメ化という影響を受けて実際に舞台へと足を運ぶ行動「聖地巡礼」が見られたこと、また文化史的な観点からの重要性を指摘することができる。

この『青い花』は既述のように鎌倉やその周辺を舞台にした作品である。江ノ電沿線にある松岡女子高等学校に入学した万城目ふみと同じく江ノ電沿線にある藤が谷女学院に入学した奥平あきらが 10 年ぶりに出会ったことから物語は始まる。特に万城目を中心として女性同士の恋愛が描かれている。この作品の舞台として鎌倉が選ばれた理由として志村氏は羽海野チカ氏との対談の中で「羽海野：『SLAM DUNK』もそうでしたけど、鎌倉ってわりと都心から近くて、架空の街が作りやすい。リアルをうまく混ぜながら、ウソも描けて。志村：そうですね。「ここが」って具体的に似せているわけじゃないけど、パッと出てくる風景とかで「あ、湘南のあの辺なのね、ここは」って思ってもらえる」（志村貴子と藤が谷女学院新聞部『青い花読本』太田出版、2009 年、pp99）と述べてお

り、東京の郊外という地理的な距離感が作品を描くにおいては利点となっており、さらには既存の湘南イメージが同様に場所を描く際の利点として活用されていることがわかる。しかし志村氏自身が連載当初に「この作品を描こうと思ったときに江ノ電が描きたいな、なんかすごく素敵だったなって思って、それなら鎌倉しかないって思って鎌倉を舞台にしたんです。ただ残念なのは撮った写真のほとんどが活躍する場がなくて(笑)、そこが後悔しているというか、もっと鎌倉感を出せればなあ、もっと細かいところまで描きたいなあっていつも思っています」(『NO COMIC NO LIFE 第56回：志村貴子先生インタビュー』『とらだよ。』Vol. 62、2006年)と発言していることから、読者に鎌倉という舞台、江ノ電という場所は分かるも、必ずしも登場人物らが日常的に歩く道や住む世界の詳細な施設等を描いていたわけではなかった。

『青い花』は2009年7月から9月にかけて『青い花 Sweet Blue Flowers』というタイトルでアニメ化された。この作品の監督をつとめたカサキケンイチ氏は「鎌倉って、本当に絵になるんですよ。普通の住宅街の踏み切りだったり、あと江ノ電にしても住宅街の真ん中を走ってるところだったりとか、すごくおいしい絵が撮れる。ただ、普通の人には「これが鎌倉です」ってわかりづらいんで、御霊神社だったり、比較的わかりやすい場所をピックアップして使うことになったんですけど」(前掲『青い花読本』pp72)とあるようにアニメ化において鎌倉という舞台は魅せるという点においても非常に重要視され、しかも、地域性を生かすには名所旧跡などの特徴的な場所を提示する必要性を述べている。志村氏によって選ばれた鎌倉という場所がアニメというフィルターの中でより具体性を以て、視聴者へと届けられていることが理解できる。

このように舞台として鎌倉は選択され、作品へと生かされていったわけだが、作品の内容自体との兼ね合いはどうであろうか。漫画家のオノナツメ氏と志村氏との対談の中で「志村：王道のセリフを言わせるには、外国を舞台にするとやりやすいとか、ちょっと時代がかった設定のほうがよかったですよね。現代だったら、ちょっと浮いちゃうようなセリフでも「この時代設定だったらやりやすいかも」みたいな。 インタビュー：といいながら、『青い花』に出てくる女の子たちは、まさにいまの女子高生なわけですよ？ 志村：でも汚いこととかは言わないんです。(中略)本当に女子高に通っている人たちからすれば「これって現実と違う」って、異論が出てくるんじゃないかな、と思うんですけど。 インタビュー：そういう意味では、ある種のファンタジーだって意識はあるんですね。 志村：うん。そういう意識はあります」(前掲『青い花読本』pp119・120)と述べている。このことから現実の鎌倉やその周辺を舞台としながらも、作品内で描かれている内容はファンタジーとしての認識を抱えていることが理解できる。

このことは「私が通っていた女子高はお嬢様学校ではなかったの、本当に“お嬢様学校ってこんな感じ?”という想像だけで描いているんですけどね」(「志村貴子徹底インタビュー」『百合姫』21号、2010年)という発言にも通ずる。このファンタジーとしての女子高という存在と実際の鎌倉という舞台の相関関係は「出身が同じ神奈川県横浜の外れなんですけど、鎌倉は近いようで遠いご近所という感じで、あこがれもありますね。特に“海岸沿いの青春”にあこがれました」(前掲「志村貴子徹底インタビュー」)や「インタビュワー：文学の香りもしたりして、なんとなく“乙女=鎌倉”みたいなイメージがありますよね。実際にお嬢様学校もありますし。鎌倉って、少女マンガ的なあこがれの対象という感じがします。志村：そうなんです。鎌倉を舞台にしたことも含め、“お嬢様学校を舞台にしたい”、“かわいい制服が描きたい”、“演劇の要素を入れたい”・・・とか、『青い花』って、私の少女マンガに対するあこがれというか、欲望が詰め込まれたはなしなんですよね」(同)という発言があるように、鎌倉という土地にファンタジー性ある内容を被せることの有用性が指摘できる。

つまり志村氏が述べるように、現代を描きつつも決してリアル世界そのものを描くのではなく、ファンタジー性を内包した作品を描く場合、鎌倉という土地は東京などの都会からの地理的な距離感だけではなく、ファンタジーなお嬢様学校を描くだけの心理的な距離感が存在していたがゆえに舞台として選択され活用されていったことが分かる。

前掲の『ピンポン』は明確に同時代的な鎌倉という土地を描いていないが、この作品は他の鎌倉を舞台とした作品と同様に同時代的な鎌倉を描いている。しかし、そこには志村氏が指摘するような地理的な距離感および心理的な距離感が存在するがゆえに、他の作品とは違う作風となっている。同時代を描きながらも、決して同時代性に密着することなく、リアルさを残しつつファンタジー性が希求されている。そして特にこれまで述べてきたような明治期から続く鎌倉イメージ、郊外化や避暑地といったどちらかといえばハイソサイエティと捉えられ、戦後の若者文化の対抗概念として飲み込まれ消えていったものをこの『青い花』は見事に再生産しているのである。この背景には一つには作品各話のタイトルが、第一話の「花物語」が吉屋信子の同名作品から引用しているように古典的な文学作品名から取られていること、さらには主人公の一人である万城目の容姿がストレートロングの黒髪で眼鏡といった明治・大正期に作られた「文学少女」という枠組み(木村2005)に当てはめられることが指摘できるであろう。この点から時間的な距離感が大きく存在し、読者から現実感が希薄となりうる明治期・大正期に生成されたはずの鎌倉イメージが、「古都」として存在し続ける鎌倉(福澤2007)を舞台に描き、作中に同じく明治・大正期に生成された「文学少女」イメージ(木村2005)を散り

ばめることによって違和感なく再生産することに成功している。それは作中の藤が谷女学院の舞台が鎌倉文学館であることも無関係ではないであろう。鎌倉文学館の建物は旧前田侯爵家の別荘であった。そのことも志村氏が表現する「お嬢様学校」のモデルとなったことは鎌倉に多く存在した別荘の一つであり、その文化を内包する点から昭和期を飛び越えて接続されることへの違和感をぬぐい去っている。

そしてもう一つの背景として志村氏自身が述べているように今野緒雪氏による『マリア様がみてる』（コバルト文庫、200年8月現在既刊37巻）の存在がある（前掲「NO COMIC NO LIFE 第56回：志村貴子先生インタビュー」）。『マリア様がみてる』も明治・大正期に少女雑誌などで見られた少女像が現代を舞台として甦った作品である。この作品のヒットがあったことで、描かれている少女像がたとえ明治・大正期に生成されたものであっても、違和感なく受け入れる一つの指標になったと考えられる。

5. アニメ聖地巡礼からみる鎌倉の歴史性

では実際に鎌倉を舞台にした作品アニメ聖地巡礼ではどのような場所を訪れるのだろうか。岡本氏が指摘しているように旅行後行動としてアニメ聖地巡礼を終えた後にブログやホームページ等に撮影してきた画像などをアップし、それを見た人たちが再度、アニメ聖地巡礼を行うといった循環作用が生じている（岡本 2010）。したがって、本章ではブログ等のネット上においてアニメ聖地巡礼の行き先としてどのような場所が選択されているのかを検討する。なお、前章で指摘した『青い花』だけでなく、比較対象として同じく鎌倉を舞台とし、2000年代に放送されたアニメ『うたのかた』（2004年10月から12月にかけてTVKなどで放送）、『エルフェンリート』（原作は岡本倫による同名の漫画作品。集英社より全12巻。アニメ放送は2004年7月から10月にかけてAT-Xにて放送）のアニメ聖地巡礼を取り上げる。

	青い花	うたのかた	エルフェンリート
鎌倉文学館	20		
極楽寺駅	17		21
ミルクホール	16		
無心庵	16		
鎌倉駅周辺	14	10	3
江ノ島	13	10	13

成就院	13		17
和田塚駅	10		
稲村ヶ崎駅	9	3	
御霊神社	9		
北鎌倉駅	9		
腰越駅	3	2	
鎌倉大仏	3	7	3
鶴岡八幡宮	2	10	3
鎌倉高校前駅	2	1	
銭洗弁財天	1	7	11
佐助稲荷神社	1	1	14
源氏山公園		7	
七里ガ浜		4	2
鎌倉市中央図書館		4	
諏訪神社		3	
光明寺		2	
八雲神社		2	
鎌倉女子学園		2	
由比が浜		2	13
材木座		1	
長谷駅		1	12
円覚寺		1	
東慶寺		1	
浄智寺		1	
明月院		1	
建長寺		1	
龍口寺			1
吉屋信子記念館			1
旧前田侯爵邸	5		
横浜	4		
各アニメの「聖地巡礼」を取り上げたホームページ、ブログ、動画から作成。『青い花』に関するブログ等は23サイト、『うたのかた』は12サイト、『エルフェンリート』は25サイト。数字はサイト数。空白部分は0回を差す。同じ場所に2回行っているサイトでも総じて1回とカウントした。			

表にあるように、『青い花』の「聖地巡礼」では、作中では藤が谷女学院として描かれている鎌倉文学館が訪れる機会が最も多く、ついで作中でも登場人物たちが通る極楽寺駅、登場人物たちが訪れるミルクホールや無心庵といった喫茶店、日常的に使用する鎌倉駅周辺、デートの場として登場人物らが訪れる江ノ島や成就院といった場所が比較的多く訪れられていることがわかる。また作中とは関係のない鎌倉大仏、鶴岡八幡宮、銭洗弁財天、佐助稲荷神社なども同時に訪れている場合があることも指摘できる。このように作中に関係ある場所を訪れる傾向は他の作品においても同様で、『うたのかた』では登場人物らが訪れる江ノ島や鶴岡八幡宮、鎌倉大仏などが訪問先として集中している。また、観光地ではないが作品に関係あるというだけで鎌倉市中央図書館も訪れている。『エルフェンリート』の場合も同様で、作中に関係のある江ノ島、成就院、佐助稲荷神社といった場所が同じ様に選択されている。ここで着目できるのは、『青い花』、『うたのかた』、『エルフェンリート』の3作品それぞれのアニメ聖地巡礼で訪れる場所は全く違うということである。作中で取り上げられる頻度や重要な場面で取り上げられたかどうかで訪れる回数に大きな差が生じる。特に『青い花』では登場人物らが通う学校のモデルとなった鎌倉文学館ではあるが、その他の作品では登場しないため全く訪れられていない。

本稿で取り上げた鎌倉を訪れるアニメ聖地巡礼はそれぞれの作品にのみ固執してしまい偏った場所しか訪れないということが分かる。そして鎌倉におけるアニメ聖地巡礼が、岡本氏が述べる旅行後行動でのブログなどでの情報発信のみによって参加者以外に可視化されていないという状況に陥っている（岡本 2010）。しかも、それぞれのサイトをみるファンの間のみで連環作業になっており、いくつかのサイトでは最も詳細に取り上げているサイトを参照したと明記されていることから分かるように、あるサイトによって検証・考察された場所が「聖地」として固定化される傾向にある。それは表においても、いわゆる作中に関連する「聖地」とされた場所以外へ足を向けるのはほんの一部となっていることから分かるであろう。これはある意味で鎌倉市などの自治体、または観光案内関係の書籍などで紹介される観光地としての「鎌倉」から考えると「異常」とも思える行動であるが、この状況から導き出される異常さというものがいわゆる一般的な社会に顕在化しているわけではない。

その理由の一つとして、このアニメ聖地巡礼というのが非常に少数の人々によって行われており、鎌倉市を訪れる観光客の全体数から考えると顕在化することが逆に難しいことが挙げられる。つまり鎌倉という場所においてはアニメ聖地巡礼がスモール・ツーリズムの一例でしかないということである。またもう一つの理由としてこれが従来、指

摘されてきたような鷺宮神社といったいわゆるアニメ聖地巡礼の成功事例と比較すると分かりやすいが、アニメ聖地巡礼を中心としたツーリズムの展開にはなっておらず、従来の鎌倉観光の中に内包されてしまっている点である。鷺宮神社の場合は地元の商工会などの地域社会側、さらには出版社など様々な媒体の助力によって(山村 2008、岡本 2009)アニメ聖地巡礼はウェブだけではなく様々な媒体において可視化され、そして今や更なる場所へと変容しようとしていることが指摘されている(今井 2010)。つまり従来、観光学などで検討されてきたゲスト・ホスト関係ではなく、行為者(ファン)・観光資源(歴史的建造物など)・観光対象(作品舞台)・作品・地域社会といった要素が連環して稼働しているからこそ、アニメ聖地巡礼を単にファンが舞台となった場所を訪れるだけに終わらせずに機能させていると考えられる(図参照)。

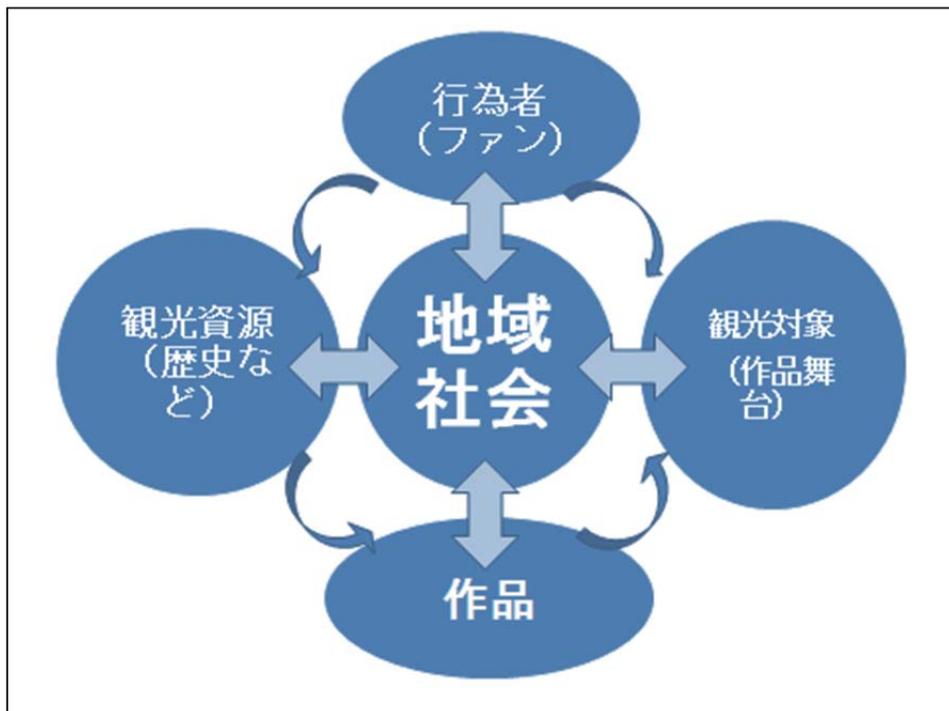


図 アニメ聖地巡礼概念図

例えば鷺宮神社の場合だと行為者(『らき☆すた』ファン)・観光資源(鷺宮神社や茶屋)・観光対象(鷺宮神社など)・作品(『らき☆すた』)・地域社会(鷺宮商工会など)が連携しているからこそ成立しているアニメ聖地巡礼という事象なのである。しかし、この鎌倉という場所の場合は既に連綿と続いてきた観光地としての要素が整っており、観

光資源や観光対象が従来の観光活動によって整備され、地域社会のバックアップもまた同様に存在している。したがって、アニメファンが鎌倉という土地を訪れた際にも、その歴史性の中に埋没してしまうわけである。

もう一つの大きな特徴として鷲宮神社やその他いくつかの地域では、アニメ聖地巡礼者の足跡を残す機能のための場所が存在していることが挙げられる。その例としては神社においては絵馬が挙げられ（今井 2009・2010、佐藤 2010、玉井 2009）、神社など絵馬を奉納する場所以外では訪問ノートなどが挙げられる（岡本 2008、玉井 2010）。これによってアニメ聖地巡礼者同士の連環作業の補強というだけではなく、観光地側や他の観光者への可視化という行為にもつながる。しかし、現状、鎌倉を舞台としたアニメ作品のファンが訪れる場所において公的にこのような足跡を残す行為が可能な場所は存在していない。

6. おわりに

以上、述べてきたことをまとめる。近世期そして明治初期において鎌倉は、名所旧跡を抱える観光地であった。しかし、その状況に「廃都」と称されるような変化のない空間であったことは否めない。その後、次第に海水浴などが盛んになり、東京からの交通が整備され、別荘地などが立ち並ぶことによって変化していくことになった。しかし、名所旧跡の存在は変化することなくあり続けるがゆえに、東京の郊外としての発展するようになった鎌倉は名所旧跡のある鎌倉と郊外化する鎌倉という二側面を持つようになる。

しかし、昭和期に小田急鉄道の発展などの影響もあり、多くの海水浴客が鎌倉地方に押し寄せるようになった。そして従来からある鎌倉に対するイメージは、太陽族などを筆頭とした若者文化によって対抗概念として飲み込まれていくことになる。その若者文化の変遷を一部のコンテンツ作品は受けているが、鎌倉を舞台とした『青い花』はそれとは別の文脈から生まれてきた作品である。明治期・大正期などに生成された、郊外化や避暑地といった、戦後の若者文化の対抗概念とされた鎌倉イメージを『青い花』は見事に再生産している。

その『青い花』など鎌倉を舞台とした作品をめぐるアニメ聖地巡礼では、それぞれの作品舞台に大きく偏った訪問が行われることがわかる。この行動はほとんどがアニメ聖地巡礼者の内部的な連環活動に終始し、また、鎌倉への様々な観光の一つの事例として埋没し、ブログなどの旅行後行動を丹念に且つ主体的に洗い出さない限りは顕在化して

こない。その理由の一つとしてスモール・ツーリズムであるということ、そしてアニメ聖地巡礼を構成する観光要素が既に連綿と続いてきた鎌倉観光の中に飲み込まれていることが挙げられる。

しかし、課題として次のようなものが指摘できる。本稿では鎌倉をフィールドとして取り上げたが、鎌倉のように観光地としての歴史性、イメージの歴史の変遷が追いややすい場所自体が稀有なものと考えることができる。したがって、このような歴史性のない場所ではどう考えれば良いのであろうか。さらには井手口氏が指摘するように作品自体の連載が終了した場合などによって、その土地へのアニメ聖地巡礼等の求心力の低下という恐れが存在することである（井手口 2009）。今回の鎌倉の事例は明治期から様々な文学作品や音楽、そして漫画・アニメに取り上げられてきた場所である。しかし、全ての土地がそうではなく、全ての作品が「聖地巡礼」を引き起こすわけではない。一作品のみで起こる現象なのか、様々な歴史の変遷を踏まえているのかを考える必要があるであろう。

参考・引用文献

- 井手口彰典、2009、「萌える地域振興の行方―「萌えおこし」の可能性とその課題について」、『地域総合研究』37-1号、pp. 57-69
- 今井信治、2009、「アニメ「聖地巡礼」実践者の行動に見る伝統的巡礼と観光活動の架橋可能性：埼玉県鷲宮神社奉納絵馬分析を中心に」、『北海道大学文化資源マネジメント論集』11号、pp. 1-22
- 今井信治、2010、「コンテンツがもたらす場所解釈の変容―埼玉県鷲宮神社奉納絵馬比較分析を中心に―」、『コンテンツ文化史研究』3号、pp. 69-86
- 岡本健、2008、「アニメ聖地における巡礼者の動向把握方法の検討：聖地巡礼ノート分析の有効性と課題について」、『観光創造研究』2号、pp. 1-13
- 岡本健、2009、「らき☆すた聖地「鷲宮」巡礼と情報化社会」、『観光の空間』、ナカニシヤ出版（岡本 2009a）
- 岡本健、2009、「「らき☆すた」に見るアニメ聖地巡礼による交流型まちづくり―埼玉県鷲宮町」、『観光の地域ブランディング』学芸出版社（岡本 2009b）
- 岡本健、2010、「コンテンツ・インデュースト・ツーリズム：コンテンツから考える情報社会の旅行行動」、『コンテンツ文化史研究』3号、pp. 48-68

- 加藤厚子、2005、「映像が創る「湘南」」、『湘南の誕生』、pp. 202-221
- 加藤厚子、2005、「出版文化と若者」、『湘南の誕生』、pp. 222-239
- 加藤理、2002、『“古都” 鎌倉案内—いかにして鎌倉は死都から古都になったか』、洋泉社
- 河島伸子、2009、『コンテンツ産業論』、ミネルヴァ書房
- 木村カナ、2005、「二十一世紀文学少女・覚書」、『ユリイカ』37-12号、pp. 61-70
- 黒田敏雄、1977、「あたらしい地域史のために」、『日本史研究』183号、pp. 53-68
- 佐藤善之、2010、「オタク絵馬とは何か：宮城県護國神社の絵馬調査結果とその分析」、『CATS 叢書』4号、pp. 115-127
- 清水強志、2008、「アニメーション産業による地域振興」、『創価人間学論集』創刊号、pp. 103-120
- 玉井建也、2009、「「聖地」へと至る尾道というフィールド—歌枕から『かみちゅ!』へ—」、『コンテンツ文化史研究』1号、pp. 22-34
- 玉井建也、2010、「物語・地域・観光—「稲生物怪録」から『朝霧の巫女』、そして「聖地巡礼」へ—」、『コンテンツ文化史研究』3号、pp. 35-48
- 塚本学、1976、「地域史研究の課題」、『岩波講座日本歴史』25巻、
- 出口弘・田中秀幸・小山友介、2009、『コンテンツ産業論』、東京大学出版会
- 難波功士、2007、『族の系譜学』、青弓社
- 長谷川文雄・水島川和夫、2005、『コンテンツ・ビジネスが地域を変える』、NTT出版
- 長谷川文雄・福富忠和、2007、『コンテンツ学』、世界思想社
- 原淳一郎、2001、「大山参詣をめぐる社寺参詣者の動向：藤沢・江ノ島・鎌倉との関連で」、『史学』70-2号、pp. 149-170
- 原淳一郎、2005、「近世における参詣行動と歴史意識—鎌倉の再発見と懐古主義」、『歴史地理学』47-3号、pp. 1-23
- 福澤健次、2007、『地域再生 まちづくりの知恵—古都・鎌倉からの発信』、平凡社
- 増渕敏之、2010、『物語を旅するひとびと—コンテンツツーリズムとは何か』、彩流社
- 本宮一男、2005、「戦後鉄道資本の観光戦略と片瀬・江の島」、『湘南の誕生』、pp. 176-200
- 森下剛、2007、「マンガ・アニメキャラクターと地域振興に関する研究(1)」、『梅花女子大学短期大学部研究紀要』56号、pp. 15-22
- 森下剛、2008、「マンガ・アニメキャラクターと地域振興に関する研究(2)」、『梅花女子大学短期大学部研究紀要』57号、pp. 27-36
- 藪田貴、1985、「地域史研究の立場」、『歴史科学』99・100号、
- 山村高淑、2008、「アニメ聖地の成立とその展開に関する研究：アニメ作品「らき☆すた」による埼玉県鷲宮町の旅客誘致に関する一考察」、『国際広報メディア・観光学ジャーナ

ル』、7号、pp. 145-164

山本英二、2008、「日本中近世史における由緒論の総括と展望」、『歴史学研究』847号、pp. 2-10

渡部亜希、2005、「イメージの中の湘南」、『湘南の誕生』、pp. 240-269

渡辺浩一、2004、『まちの記憶 播州三木町の歴史叙述』、清文堂出版

渡辺浩一、2009、「記憶の想像と編集—日本近世の近江八幡を事例に」、『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』5号、pp. 1-22